

バリ便り

昨年5月にデンパサールに着任された千葉広久 在デンパサール総領事にバリにおける活動状況、バリの現況等について、今月号、来月号の二回にわけてご寄稿いただきました。興味あるお話をお楽しみ下さい。

はじめに

「若い諸君はこれから外の世界に羽ばたいていくに当たっていろいろな外国に関心を持っていると思うが、私は諸君が日本にこそより大きな関心を持って日本からもっと見習うべきだと考えている。」

これは、私が昨年11月にバリ州北部にあるバリ・マンダラ高校を訪問した際、全校生徒を前に挨拶されたマデ・マンク・パスティカ・バリ州知事が語った言葉です。その日はちょうど日本からいらっしゃった三味線の先生を同校に案内して演奏会を行う予定でしたので、日本からのお客さんを前に知事も多少はリップ・サービスをされたのかもしれませんが、しかし、知事ご自身も観賞し大成功に終わった三味線演奏会とともに、多くの生徒の心にこの知事言葉も届いたのではないかと思います。印象的な出来事でした。「バリの特に若い人たちにもっと日本に目を向けもらい、日本のことを深く正しく知って欲しい。」これは当地における日本総領事として私自身も常日頃から心している活動目標の一つですので、知事のお言葉は正に我が意を得たりの有り難いものでした。

翻って、世界的にも有名な観光地であり日本人にもなじみの深いバリについて、観光だけではない様々な側面を多くの日本の方々に知っていただくということも両国の関係強化にとって大切なことだと思います。私は当地に着任してちょうど1年が経ったところでありまだ知らないことが多いのですが、本稿では当地での最近の動きなどを断片的ではありますがいくつか紹介してみたいと思います。



バリ・マンダラ高校（整列する新入生を前に入学式で挨拶するパスティカ・バリ州知事）

バリ・マンダラ高校

まずは冒頭に引用したバリ・マンダラ高校について。同高校はパスティカ知事の

イニシアチブで2011年に開校された全寮制の高校です。観光の中心地とは反対の島の最北端の海岸近くにあります。この学校で特徴的なのは「貧しくなければ入学できない!」ということです。「能力や意欲にかかわらず、ただ一点家庭が貧しいが故に勉学の機会を与えられず、あるいは進学を諦めなければならない困窮家庭の子女がバリの田舎にはまだまだたくさんいる。貧困は社会の罪だが、それを我々が放っておくのならばその罪はさらに大きい。」という信念の下で学費から生活費まで一切無料のユニークな教育施設として立ち上げられたのがこの高校です。応募者は毎年多数に上りますが、より貧しい者から優先的に入学を許可するという方針であり、実際に入学希望者の家庭を訪問してどれほどの困窮家庭なのかを厳しく審査しているとのこと。高校進学など夢のまた夢であった生徒たちは、これからの人生に新たな夢を得て、毎日規則正しく生き生きと学習しています。先日卒業式があり私も参列しましたが、国際標準の教育システムに則り勉学に励む生徒たちの成績水準はすでに州内トップクラスに達し、卒業後は国内外の有名大学への進学が決まった子も多いということでした。日本との関係でもいろいろな動きが出ており、例えば静岡大学が地元企業や自治体と協力した「アジア・ブリッジ・プログラム」で同校卒業生の同大学への留学と卒業後の地元企業への就職を支援するという話が進んでいます。また、同校には日本語コースもあるところ、日本語教師のアシスタントとしてこの秋から「日本語パートナーズ」の派遣が前向きに検討されています。貧しい生い立ちながらも懸命に頑張り将来社会のリーダーを目指している生徒たちを我が国としても支援していけたらと思います。



バリ・ヒンズー教総本山
ブサキ寺院の大祭

最近の観光動向

ひと頃バリ島を訪れる日本人旅行者数は外国人旅行者の中で第1位を占めていました。しかし、2008年の約35万5千人をピークにその数は減っていき2010年10月に日本の航空会社の直行便が廃止された影響もあってか2011年には約18万人にまで落ち込みました。その後は緩やかに回復傾向にあります。この間、隣国の豪州からそしてここ数年は中国からの旅行者数が飛躍的に増加しています。また去年はインドからの旅行者数が対前年比で6割近く伸びる等新たな動きも出てきています。ご参考までに昨年の国別旅行者数の統計を挙げておきます（出典：Bali Tourism

Office、括弧内は対前年比伸び率)。第1位：豪州 1,137,413 人 (+17.64)、第2位：中国 986,926 人 (+43.35)、第3位：日本 234,590 人 (+2.81)、第4位：英国 221,149 人 (+31.93)、第5位：インド 186,638 人 (+57.26)、第6位：マレーシア 179,451 人 (-5.74)、以下、米国、フランス、ドイツ、韓国、シンガポール、台湾と続き、ここまでが 10 万人以上の大台に乗っています。

このような中、5 月下旬から日本（成田）とバリの間に LCC 便（AirAsia X）が新たに就航しました。今後日本からの旅行者数のさらなる回復とともに、バリからのインドネシア人訪日旅行者数も増えることが期待されています。



バリダンス（バリ舞踏）



サヌール・ビレッジ・フェスティバル

開発の展望と課題

当地の政府や経済界の方々にバリ州が抱える課題や今後の展望について伺う機会があります。その際に、多くの方々が指摘する課題としては、①ゴミ問題、②道路・港湾等のインフラ整備、③上下水道整備、④海岸浸食、⑤地域間格差の解消、均衡ある経済・社会開発、⑥電力等エネルギー供給、再生可能エネルギー、⑦農業開発、⑧伝統文化・習慣の保存、等があります。これらのうちいくつかについてお話ししてみたいと思います。

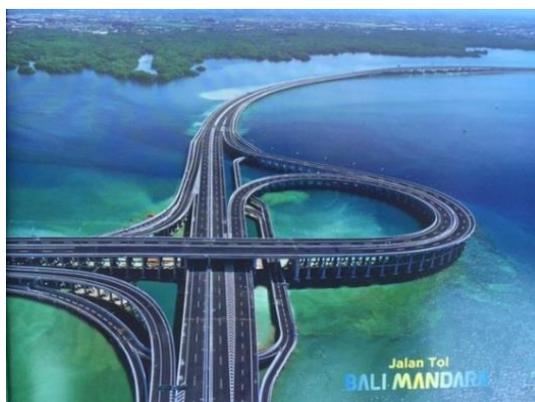
まず、ゴミ問題。これはもちろんバリ島に限った問題ではありません。しかし、一般家庭ゴミ問題もさることながら、観光業に大きく依存しているバリにとっては海岸のゴミや不法廃棄物、洋上に浮遊するプラスチック・ゴミ、観光スポットに散乱するゴミ等は、観光業の将来にとっても捨て置けない死活的な問題です。また、当地では処理できない医療ゴミ等を最終処分施設のあるジャワ島に送る輸送コストが大きな財政負担になっているとのこと。このような中、現在、JICA の中小企業支援事業の一環として沖縄県の焼却炉メーカーが開発した小型焼却炉の実証事業

がデンパサール市の公立病院で行われています。医療廃棄物を含む各種のゴミを効率よく焼却しかつ有害な排気が出ないという優れたもので、市当局も日本の新技術による本件実証事業の成果に大きな期待を寄せています。

島内の均衡ある経済開発の必要性が報道等でも良く取り上げられています。観光で潤う南部地域とそれ以外の地域の格差の問題です。この関連で最近注目を集めているのがバリ州北部に第2国際空港を建設する計画です。海上フロート型と陸上建設型の2案があるようですが、海上フロート開発計画にはカナダ企業が現地法人を立ち上げ参入しており、本格的な準備が進められている模様です。中央政府の許可が下りれば早ければ8月末にも起工の可能性があると報じられています。

バリ島には2013年APEC首脳会議の開催直前に開通したバリ・マンダラ高速道路（サヌール地区ーングラ・ライ国際空港周辺ーヌサ・ドゥア地区間の全長12.7 km）がありますが、2018年10月の世銀・IMF総会のバリ島開催に合わせて空港から同高速道路までを直接繋ぐアンダー・パスを建設する計画が発表されました。このほかにも、まだ構想の域を出ていないものの、バリ島の南部と北部を結ぶ高速道路やバリ島周回観光鉄道の建設計画などもあるようです。10年後、20年後あるいは30年後のバリ島の姿がどのようなものになっているか、興味が尽きないところです。

他方、ブノア湾の埋め立て開発計画に対しては地元住民からの強い反対運動があります。ブノア湾は上述のバリ・マンダラ高速道路が縦貫している大きな湾ですが、ここに埋め立てによりいくつかの人工島（総面積700ha）を作り、国際会議場や文化施設、ホテル、レジャー施設等を建設するという計画です。これに対し、環境破壊への懸念、予定地の中にバリ・ヒンズー教の聖地が含まれること、そして地元にとって直接的な裨益がないとの懸念などから地元住民は同計画に強く反発し抗議デモを展開しています。最終決定権を持つ中央政府の判断はまだ示されていませんが、引き続き今後の展開が注目されます。



バリ・マンダラ高速道路

Pt. JasaMarga Bali Tol 社のパンフレットより

(以下次号に続きます。)